



## 情報が教育に道を拓く —情報教育研究集会を企画して—

平成 20 年情報教育研究集会 企画・プログラム委員長  
小林 史典<sup>1</sup>

1988 年 [1], 1998 年 [2] に続き, 3 度目の情報教育研究集会（旧情報処理教育研究集会. 以下「集会」と略す）を本学がお世話することになった, と聞いたのは昨年春でした. こうした会議の実施は決して楽ではないのですが, では, 簡素化したら労力が無視できるか, となると, それもありません. それなら, 参加者に, 今回来て良かった, と感じて帰っていただけるような企画をしよう, と考え, いくつかの点に力を入れました. ここでは, 公式の報告は別稿 [3] にゆだね, このあたりの, 集会の「企画の哲学」を書くことにします.

### 1 合言葉は「パッション!」

「来て良かった」と感じていただくには, すべてに全力投球する必要はなくても, いくつか重要なポイントで, 普通の集会よりもう一步か二歩, 踏み込んで企画しなければなりません. そのために, 企画や実行の過程で学内スタッフが合言葉にしていたのが, 「パッションを込めて」でした.

つまり, ある理想像を頭に描き, それに向かって努力しよう. そして, ある程度障害が発生しても, それにメゲずに突破しよう, ということでした. そうした姿勢でいくつかの重点項目に取り組めば, 集会全体の雰囲気が変わってくる, と考えたのです. それが成功したか否かは別にして, 今回私たちがポイントにした項目をご紹介します.

### 2 「こりゃ面白い」を原動力に — 特別セッション

教育は, いろいろな背景を持った生身の学生が相手ですから, そう楽しいことばかりではありません. 特に最近著しい入学生の「多様化」で, 我慢の連続となることもしばしばです. そうしたとき, 前向きの姿勢を取り戻させてくれる一助になるのが, 新しい教育を工夫するときを感じる「楽しさ」ではないでしょうか.

幸い「情報」は科学技術の最前線で, 毎年新しいものが提案され, そのうちいくつかは急速に普及して, あっという間に人々の生活を変えてきました. たとえばパソコン, 携帯, ゲーム. これらを教育に取り込むこと, 少なくとも, 取り込めないか, と考えることが, 明日の教育を拓き, 日々の糧になるであろうことは間違いありません.

<sup>1</sup>大学院情報工学研究院 教授 [fkoba@ces.kyutech.ac.jp](mailto:fkoba@ces.kyutech.ac.jp)

表 1: 事前申込みの参加者数

セッション	参加者数
iPOD	52
Java	67
Educause	59
CMS	79
PC-SYS	43
JOCW	55
ICT-FD	52
著作権	58

そこで、この背景に沿って、次の3つのセッションを企画しました（カッコ内は表1で使う略号、その後ろは、取りまとめをお願いしたコーディネータです）:

**iPhone/iPod touch** を用いた教育ソリューションの開発と提供（iPOD）アップルジャパン（株） 平原 裕之 氏

**Java** のプログラミング教育を楽しくするために（Java）サン・マイクロシステムズ（株）山口 浩氏

高等教育における **ICT** 活用教育の推進に向けて（Educause）メディア教育開発センター 山田 恒夫教授，九州大学 井上 仁講師

もちろん、新しい、楽しいことばかりに目を向けてはられないので、これは勉強しておかないと、という、次の3つも組み込みました:

**CMS** の新たな可能性（CMS）情報処理学会 CMS 研究会

多人数利用を前提とした教育用計算機環境の構築（PC-SYS）九州工業大学 中山 仁 助教

オープンコンテンツの世界的潮流（JOCW）日本オープンコースウェア・コンソーシアム

これらにチュートリアル

米国の大学における **ICT** 活用の **FD**（ICT-FD）メディア教育開発センター 苑 復傑 教授

**e-Learning** と著作権（著作権）メディア教育開発センター 尾崎 史郎 教授（元文化庁著作権課マルチメディア著作権室長）

を加えた企画セッションには、表1のように多数の事前申込みがあり<sup>2</sup>、今回の集会の焦点になった、と感じています。図1に、席が完全に埋まったセッションの様子を示します。

こりゃ面白い、にせよ、勉強しなくちゃ、にせよ、新しい教育方法に触れることは、明らかにFDの一環です。FDというと、研修や学生評価といった、若干窮屈なイメージがあります

<sup>2</sup>当日の実際の参加者数は、平均して表の90%でしたが、人気であったことには変わりありません。



図 1: 満席の特別セッションの様子

が、これらは「マイナスを0に戻す」、消極的な方策でしかありません。それらに対して、集会の特別セッションやチュートリアルのような、「0をプラスに変える」活動が、生き生きとした教育活動には不可欠です。教員にそうした可能性を与える、この種の集会、そしてそれへの参加が、ぜひ盛んになってほしいと思います。

### 3 「ポスターは口頭より下」ではない

いくら特別セッションに力を注いだとしても、集会の主体は一般発表です。日々の教育の中で個々の教職員が得た知見をまとめ、分析し、発表すること、そしてそれを参加者で共有することは、非常に重要です。今回も多数の講演が集まりましたが、特にその中で、ポスターセッションに光を当てることにしました。

通常の学会でよくあるのは、ポスターは口頭発表よりレベルが下、という概念です。確かに、論文の査読をすると、そう明記した評価シートが送られてくることが多いのですが、それでいいのでしょうか。口頭発表は質問時間が限られていますし、セッション終了後個人的に話そうと思っていたら、途中で退場されてチャンスを逸する、ということも少なくありません。これでは、発表しっ放しに近い、一方通行のものになってしまいます。

ポスターにはもう1つの意味があります。それは、PCなどでデモンストレーションが可能なことです。口頭発表の中にも簡単なデモは組み入れられますが、ポスターならば、場合によっては10分でも20分でも、質問者とやりとりしながら、ソフトの実際の動きを見てもらえます。これは、「情報を使った教育」では、特に大きな効果が期待できる点と言えましょう。

そこで今回は、ポスター発表30件を目標に、足りない分はまず、口頭発表を第1希望に申し込まれた方にポスターへの移動を打診しました。さらに、セッション編成の過程で個別にもお願いをしました。

次は、いかにポスター発表に人を集めるか、です。これには3つの工夫をしました。

### 1. 論文賞の投票

前々回の集会から、優秀な論文のための賞が設けられました。選考は最終的にプログラム委員会の仕事であるものの、推薦データがベースになります。そして推薦の権利は、口頭セッションでは座長しかありませんが、ポスターでは、参加者全員が賞の決定に関与できるようにしました。この権利を行使するには、必然的にセッションを見歩く必要があります、人が集まることが期待できます。

### 2. ドリンクコーナーの併設

ポスター室にセルフサービスのコーヒーなどを用意し、そこで休める、あるいは飲みながらポスターの質疑応答ができる、ようにしました。このコーナーでは図2のように、休んだり、ノートPCを利用したりができます。そして、場所が奥なので、休むつもりだけの人も、コーナーへの往復にポスターを目にし、たまには立ち止まってくれるだろう、というわけです。

### 3. ポスター概要セッション

これは、人集めの手段であると同時に、発表者、参加者双方にも意味があります。

まず発表者にとっては、概要説明の回数が減ります。ポスターでは通常、来る人、来る人にいちいち概要を説明しなければいけません。概要セッションによって、その必要がなくなる、とまでは言えませんが、かなり減り、すぐ核心の質疑応答に入っていくことが可能になります。

一方参加者にとっても、関連するいくつかのテーマを概観した後、関心のあるテーマの場所に行って、より客観的な質問を投げることができます。これが、よりよい研究成果につながる、と言えましょう。



図 2: ポスター室奥のドリンクコーナー

こうして企画したポスターセッションは、おかげさまで、かなりの賑わいとなりました（図3）。



図 3: ポスターセッションの賑わい

#### 4 一般セッション

一般セッションには、特別に工夫したところはありませんが、簡単に触れておきましょう。今回は、申込み時に7つのテーマ

- 情報教育のあり方
- 情報リテラシー教育
- 教育手法と評価
- メディア教育
- e-ラーニング
- 教育学習支援システム
- 教育用情報基盤システム

から第1～3希望を選んでいただき、それを基本に7トラック、計21セッションを編成しました。なお、きわめて多岐にわたる発表内容をセッションに組むため、KJ法を使用しました。表2が、各セッションの参加人数です（参加者は随時入れ替わっており、これは最大値です）。

表 2: 分科会の参加者数

トラック	9:00-10:30	10:45-12:30	13:30-15:00	15:00-16:30
情報リテラシー教育 1	47	38	34	31
情報リテラシー教育 2	35	48		16
教育手法と評価	40	49	18	41
メディア教育/あり方/コンテンツ	27	27		32
eラーニング	74	42		22
教育学習支援システム	18	36	41	16
教育用情報基盤システム	47	66	26	35
ポスター			120-130	

## 5 通せんぼで人を流す — 企業展示

研究集会は展示会ではありませんが、関連する製品や図書の展示は、発表や聴講ついでの情報収集に貴重なチャンスとなります。そこで今回も、496m<sup>2</sup>の部屋を用意して参加を呼びかけ、計 28 社の出展となりました。

ポスターと同様ここでも、いかに展示会場に足を運んでもらうか、がポイントになります。今回は少し強引に、セッション会場の出入りが企業展示室を経由するように配置しました（図 4）。参加者には、少し折れ曲がったブース前通路を通る面倒をおかけしましたが、そのついでにブースに立ち寄る参加者が多数見られました（図 5）。

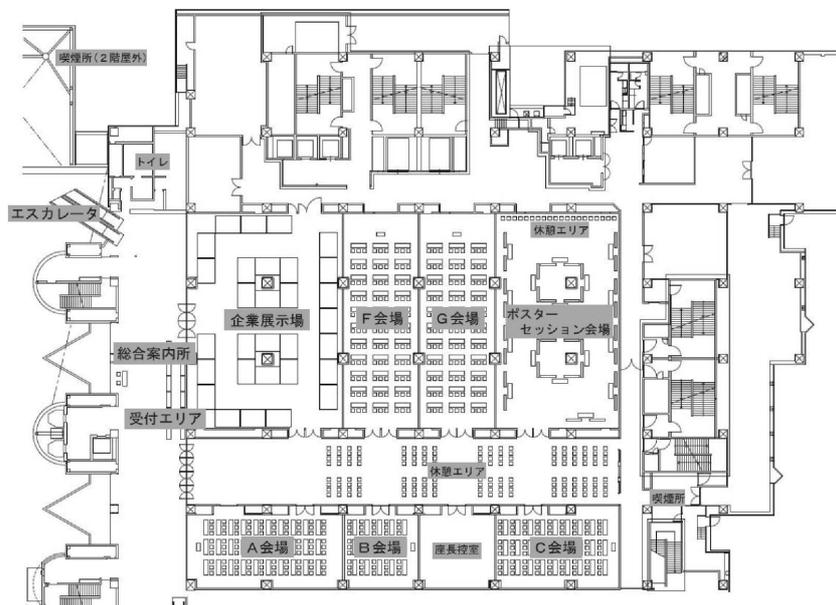


図 4: 企業展示と講演室の配置

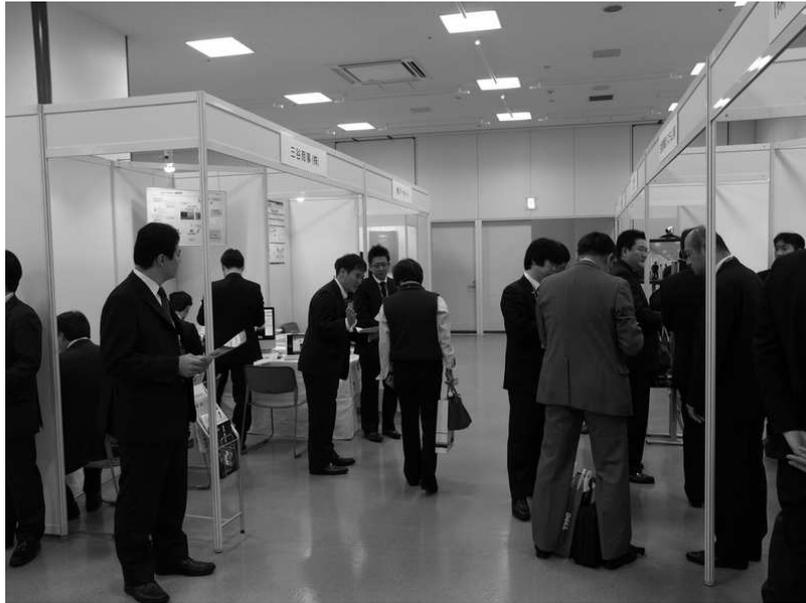


図 5: 企業展示の賑わい

## 6 入学前も大事 — 基調講演

基調講演のテーマを何にするかは、集会の方向性に大きな意味を持ちます。いろいろ考えた結果、実施から5年たち、ちょうど指導要領の改訂時期に当る、高校の教科「情報」のテーマを取り上げることにしました。

この集会の主な参加者は高等教育機関の教職員なので、中等教育の問題を基調講演で取り上げることに、抵抗感がなかったわけではありません。しかし、高等教育の情報教育において、入学してくる学生がどんな教育を受けてきたかはきわめて重要、と考えました。

しかもこの約10年間は、高校に「情報」がなかった時代、それが必修になった時代、さらに科目の改訂が予定されている、という、大きな変化の時期でした。今回は必修後最初の改訂ですから、これでひとまず変化は落ち着くと考えられ、このチャンスは逃さない、と考えたのです。講師は、文部科学省の担当である永井 克昇視学官にお願いすることにしました。

講演「高等学校における情報教育と大学」では、新指導要領案の公開が延期された<sup>3</sup>ため、その詳細は紹介されませんでした。その制約の中で、高校のことだけでなく、中学や専門高校の現状も取り上げられ、聴講者は、今後の大学教育で踏まえるべき前提条件を確認することができました。

<sup>3</sup>集会の後、12月下旬に公開されました。骨子としての2科目の内容は、それぞれ

「社会と情報」情報の活用と表現、情報通信ネットワークとコミュニケーション、情報社会の課題とモラル、望ましい情報社会の構築

「情報の科学」コンピュータと情報通信ネットワーク、問題解決とコンピュータの活用、情報の管理と問題解決、情報技術の進展と情報モラル

となっています。



図 6: 基調講演の様子

## 7 地域の協力

例外はもちろんありますが、集会の会場はこれまで、主に大学でした。それに対して今回は、地元の北九州市が運営する会議場を使うことにしました。

学外にした第一の理由は、交通の便です。本学は、駅から徒歩10分以内の工学部キャンパスも、快速が止まらないため、あまり便利とは言えません。これに対して会議場は、小倉駅から徒歩5分で、参加者には好評でした。

なお、北九州市はこうした会議の開催に熱心で、今回の運営には、市のコンベンションビューローの協力によるところがいくつかあります。たとえば図7は、小倉駅を出たところに設置された集会の看板で、参加者への歓迎に大変役立ちました。

## 8 今後も続きますように

当日は、本部に詰めつつ、いくつかのセッションの様子を見て歩きました。立ち見が出る会場まであり、どの室でも熱心に発表され、討論される参加者の姿を目にして、この集会をお世話できて良かった、と実感しました。

実は、集会は存続の危機に立たされています。それは、集会の主催校が国立大学で、数年前の法人化以降、いろいろな面で余裕がなくなってきたためです。

もちろん、いろいろな学会があるので、集会がなくなったとしても、発表のチャンスが0になることはありません。しかし、必ずしも「研究」にならない「仕事」で支えられているのが情報教育であり、そうした業務に携わる教職員に、この集会が貴重な発表の場を提供してきたことは、否定できない事実です。

多少余裕のある大学が、有志の「パッション」に支えられて、集会が継続されていくことを切に祈念し、この稿を閉じます。

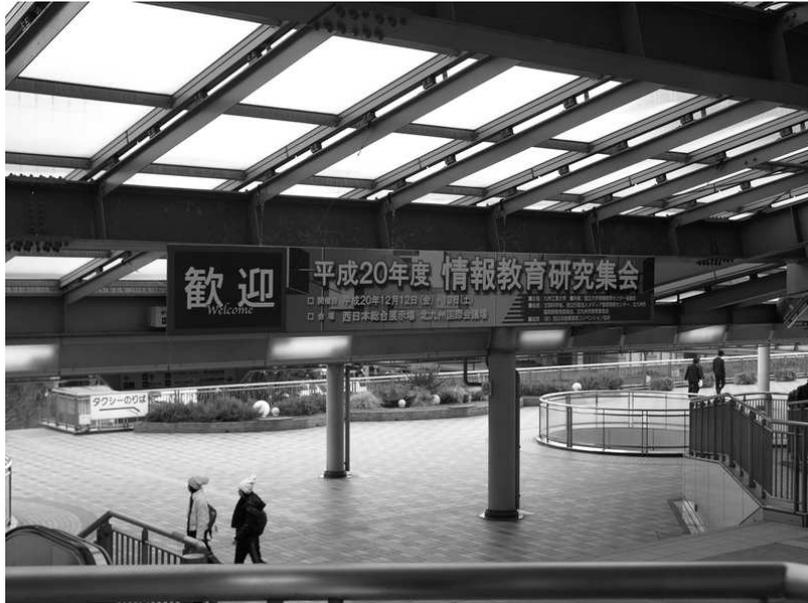


図 7: 小倉駅の看板

## 参考文献

- [1] 矢鳴: 第 11 回情報処理研究集会に思う, 九州工業大学情報科学センター広報, 第 11 号, pp.29-34 (1999)
- [2] 甲斐: 平成 10 年情報教育研究集会開催報告, 九州工業大学情報科学センター広報, 第 11 号, pp.5-16 (1999)
- [3] 甲斐: 平成 20 年度 情報教育研究集会 開催報告, 本広報, pp.12-22 (2009)